

戦前（昭和16年4月～19年3月）の首里城南殿の様子 ～國吉シヅさんの聞き取り調査より～

久場まゆみ^{*1}

1 調査の目的

本業務は、戦前の首里城および王家の建物や、行事の様子について聞き取り調査を行い、記録に残すことを目的とする。しかし、往時を知る関係者はすでに高齢にあり、緊急な記録保存が必要となっている。そこで、首里城公園管理センターでは、琉球王国時代の王家の子孫である尚家関係者をはじめ、かつての首里城や周辺の様子などを覚えている方々へのヒアリングを実施し、情報収集を行うこととした。これらの情報の蓄積が、琉球王国時代を再現するイベントや、正殿などにおける展示物の復元業務の手がかりとなるうえ、今後の首里城公園の管理・運営等にも活かすことが大きく期待されよう。

以下は、昭和16年～19年頃の首里城内の様子について詳しい國吉シヅ氏（陶芸家の故國吉清尚氏のお母様）からの聞き取り調査の内容を整理したものである。なお、聞き取り調査は平成21年9月に行った。

2 聞き取り対象者について

國吉シヅ氏は大正7年（1918）、宜野湾生まれの92歳。祖父の代までは首里鳥堀に住む士族（兼濱姓）であった。祖父は、明治12年に廃藩置県が断行され、カタカシラを切る際には涙を流したという。だが、廃藩置県後、首里に住む多くの士族が、各村々へ帰農していった。

シヅさんは、久米島出身の教員國吉清健氏と結婚した。夫清健氏は昭和16年に首里城内の第一小学校（首里区第一尋常高等）に赴任することとなった。赴任に際して、長年にわたり南殿の管理者として宿直してきた70代の仲吉館長（首里山川）から、南殿での宿直を依頼された。仲吉さんは年齢とともに衰える体力的な理由から、毎日の宿直がままならなくなっていた。そこで、若い清健さんに依頼したようである。快く承諾した清健さんは、妻のシヅさんと共に昭和19年3月まで南殿の管理を兼ねて南殿を宿舍とすることにしたという。

3 首里城内の様子

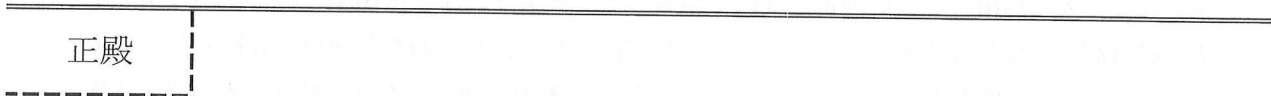
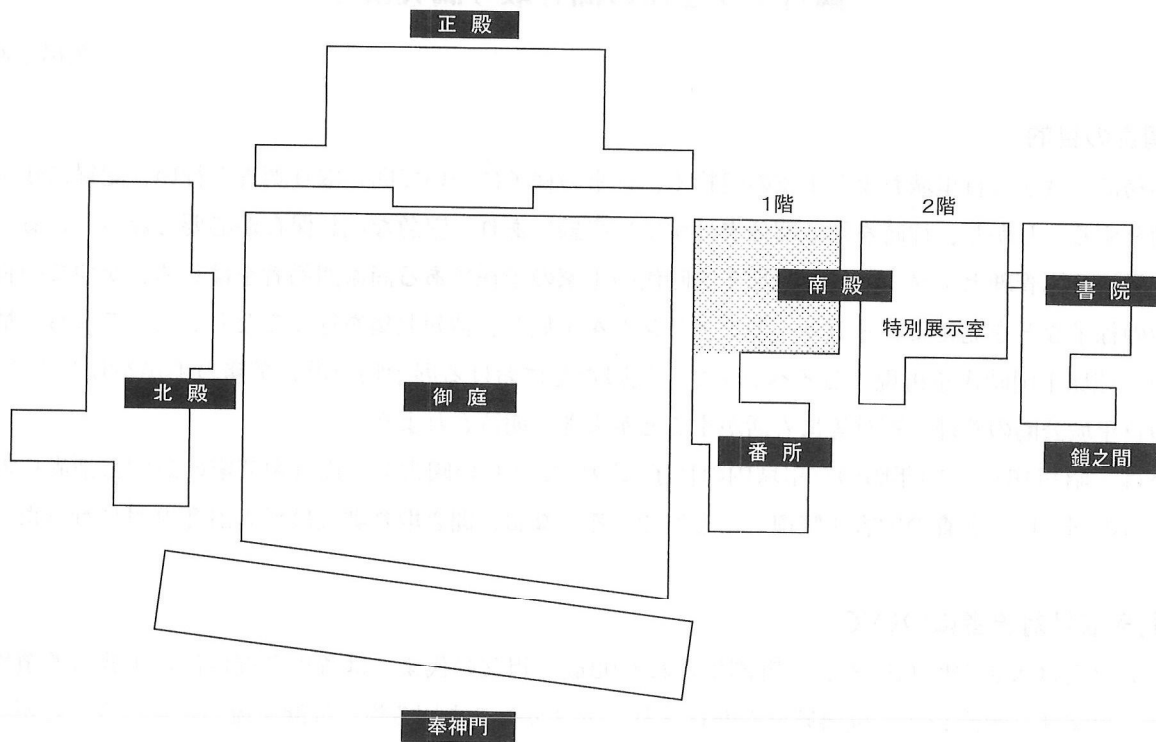
南殿は「薩摩屋敷」と呼ばれていた。屋根には黒い瓦が使用され、壁は板葺きで、板そのものの色合いであった。正殿や北殿の壁も同様であったが、北殿の屋根には赤瓦が用いられていた。

南殿の一階には24畳敷の大広間をはじめ、シヅさんらが食事をとったり、寝室として利用した9畳の部屋と、台所があった。一階の北西側に位置する台所にはレンガを使用した竈がありシンメーナービ（丸底の大型の鍋）等も揃っていた。24畳敷の大広間の南東側の一角には床が設えられていた。その大広間の北側には幅一間ほどの板敷の廊下があり、廊下北側の窓にはガラスがはめ込まれていた。そのほか、大広間の西側にも9畳より大きな部屋があったというが、詳細については不明である。

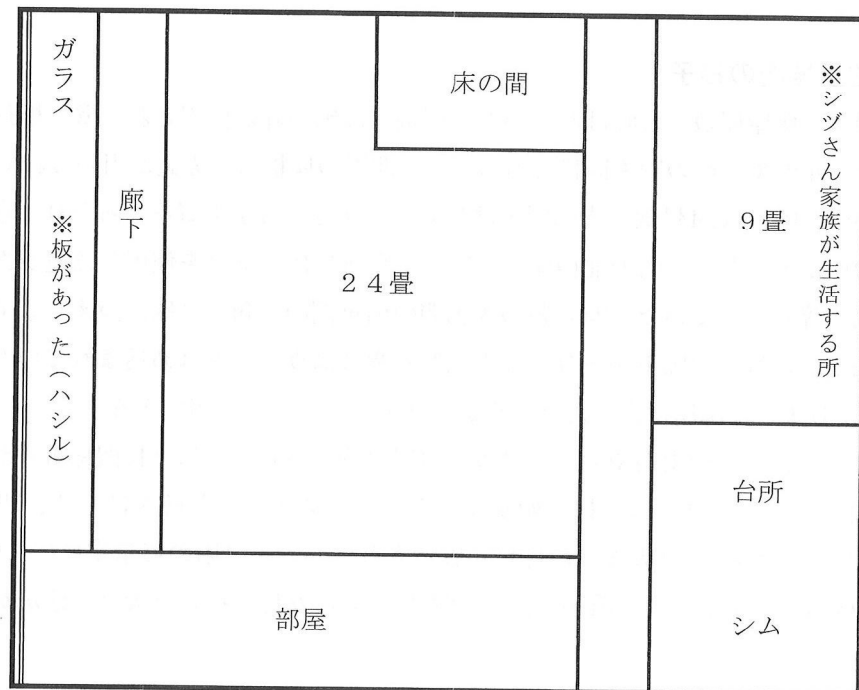
ちなみに、当時の南殿や北殿には多くの展示物があり、主に学校関係者らが見学に訪れたという。たとえば南殿二階の展示室には王様や妃が使ったという数多くの茶碗をはじめ、四角い厨子甕などの焼物の類や「ヒャクハチノタマ」（大きな数珠）が展示されていた。二階の展示室には、内階段（板）を上っていくが、上りつめると目の前の壁に髪を結いあげた琉装姿の女性を描いた大きな絵がかけられており、その絵に迎え

*1 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター 事業課 調査展示係 主任

平成21年(2010)の首里城公園 有料区域の見取図



昭和16年(1941)4月～昭和19年(1944)3月の首里城南殿の間取図
 《國吉シヅさん聞き取りより》



られるようであったという。また、展示室には案内係の女性もいたという。北殿には紅型などの染織のほか、ご馳走を盛るトゥンダーボン（東道盆）など塗り物類が多く展示されていた。

シヅさん夫妻の南殿への引越は、生徒たちが手伝ってくれた。夫の清健さんは「愛校隊」（学校を愛すること）というグループを作り、生徒を南殿に宿泊させたり、勉強を教えたり、子どもたちに色々な体験をさせた。その際に使用したのが大広間であった。また、朝の5時には物見台（アガリのアザナ）へ行き、毎日太鼓をたたいて時を知らせた。昭和19年4月から久米島の中学校へ赴任になったため、約3年の南殿の暮らしであった。また、植物も大好きであった清健さんは、桃原農園からフェニックスの鉢物などを買い求め、久米島へ持って行った。

ところで、当時の首里城内には社務所や赤田御門も含め、7家族が住んでおり、独自に「隣組」と呼んでいた。その中でもシヅさん夫婦が最も若く、まだ子どももいなかったもので、班長に選ばれ、配給係として各家族へ物資を分配した。当時は一度の配給で米一合、肉半斤程度であった。配給された米にイモを入れて炊き、「愛校隊」にもあげたという。そして、次第に戦争の色も濃くなってきた頃、東条英機が首里城正殿に参拝するのを南殿大広間のガラス越しに見たという。

4 首里城周辺の様子

昭和17・18年頃には、50年に一度の龍潭浚いの掃除も行った。一ヶ月近くかけて行う掃除であった。各家から必ず大人一人出るようになっていた。学生も手伝いに来た。首里中が総出で行う大掃除であった。

首里城の下の方には「野里御殿くのさとうどうん」という店があった。60代頃のご夫婦だったが、二人は桃原農園に頼まれて、花や植物を売っていたようである。

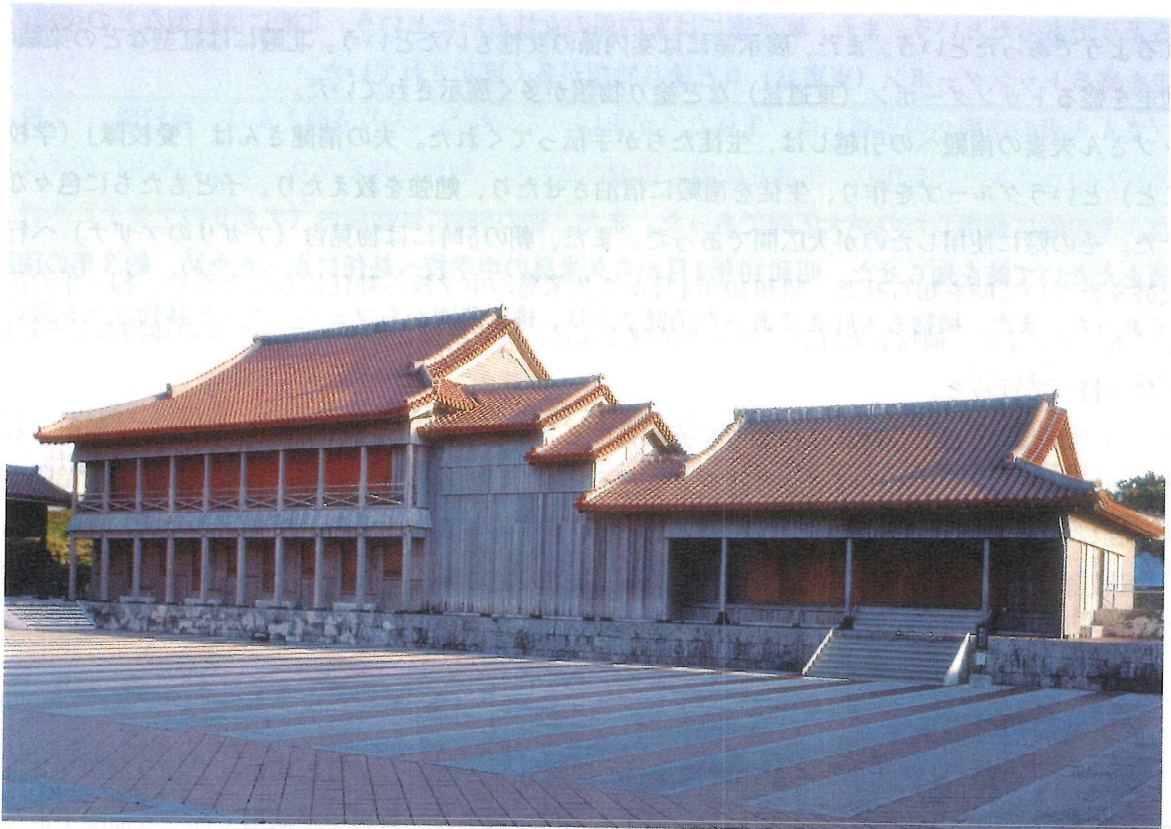
5 お産について

シヅさんは25歳の時に清尚さんを出産した。首里城は国王がいた所なので、お産はしてはいけないということだったので、旧沖縄県立博物館裏の知念という産婆さんのところで出産した。陣痛が始まると、大きなお腹を抱え、小さな提灯を下げて南殿から歩いて産婆さんの所へ向かった。清健さんの母親が久米島から来ていたので、一緒に行ってもらった。生まれたのが男子だったので、首里城にちなんで「尚」の字を入れ「清尚」と命名した。仲吉館長も大変喜び、歌を詠んでくれた。清尚の百日記念には、沖縄神社（城内にあった神社。県社）の神主さんが正殿（拝殿）で祝詞をあげてくれた。

南殿での環境が、胎教にも影響し、清尚さんは陶芸の道に進んだのであろうと、浜田庄司先生も話していたという。

6 今後の課題

シヅさん夫婦が宿直をする前に、南殿を管理していた仲吉館長は、どういう経緯で宿直をしていたのか、城内に住んでいた人々はそれぞれ管理を任されていたのか、首里城の維持管理についてはどこが行っていたのか等の疑問がわく。今後は、これらについての資料収集も含め、関係者へのヒアリングを積極的に実施していきたい。



現在の南殿（左）・番所（右）
※日本的な建築のため、壁面を塗装していない。



現在の龍潭
※シズさん達が川浚い作業をした。首里城の北に位置する。